

コミュニティ研究会（第5回）  
議事録

復興庁 福島県避難地域復興局



# コミュニティ研究会（第5回） 議事次第

日 時：平成25年12月19日（木）13:30～

場 所：ビッグパレットふくしま 3F 中会議室B

## 1. 開 会

## 2. 議 題

### （1）有識者からの話題提供

- ・小川晃子氏（ICTを活用した高齢者見守りと生活支援型コミュニティづくり）
- ・柵富雄氏（ICTを活用したコミュニティ形成の具体事例）

### （2）意見交換

## 3. 閉 会

○司会 それでは、定刻となりましたので、第5回「コミュニティ研究会」を開催させていただきます。

本日は広域的なコミュニティ維持のあり方ということで、研究会を進めてまいります。議題に入ります前に、資料の確認をさせていただきます。

お手元にお配りした資料ですが、議事次第、出席者名簿。

その次に今日の有識者お二人の御説明資料、小川先生の「ICTを活用した高齢者見守りと生活支援型コミュニティづくり」という資料。

柵さんの「ICTを活用したコミュニティ形成の具体事例について」という資料。

あと、前列の方のみなのですが、小川先生から参考資料として、新聞の切り抜き、岩手県立大学の広報誌を御用意いただいております。

柵さんからはe-手仕事クラウド図鑑と、君を応援する人がいると右上に書いてありますパンフレット、チラシを御用意いただいております。

不足する方がいらっしゃいましたら、お知らせください。よろしいでしょうか。

それでは、議題に移ってまいります。

本日は広域的なコミュニティのあり方ということで、そのテーマに即して、有識者お二人から情報提供をいただきたいと思っております。

まずお一人目から御紹介させていただきます。岩手県立大学の小川教授です。ICTを活用した高齢者見守りと生活支援型コミュニティづくりということで、情報提供をいただきたいと思っております。それでは、よろしく願いいたします。

○小川氏 皆様、こんにちは。よろしく願いいたします。

パワーポイントを操作するので、大変申しわけないんですが、座って話をさせていただきます。

ほとんど同じものをお手元に届けているところでございます。

私どもがしているのは、コミュニティづくりといいますが、少し範囲が狭くて、私は社会福祉学部の教員でございますので、高齢者を主として、安否確認の仕組み、そして、見守りのネットワークをつくるところで、ICTをどう生かすかということが出発点でございます。そこからコミュニティづくりに広げて、地域包括ケア的なネットワークをつくることに、今、至っておりますので、参考になるかどうかわかりませんが、そのお話をさせていただきます。

少しずつ飛ばしていくしかないんですが、孤立をめぐる問題ということで、整理をしている図がございますけれども、今、詳しく話しませんが、この流れをたどっていくと、そのための解決方法というのは、主として、色分けをしている3点がございます。

それがその次の図に書いているんですが、ICTを使うというところは、②の異変通報とか、把握を確実にするというところの道具でございます。別に道具は何でもいいんです。ICTを使わなくてもいいのですが、ICTはたまたま便利なので、そこで使うという位置づけです。

ただ、これだけを優先して、道具を使うことが目的になってしまうと、社会システムが

ついていけないので、うまく運用、稼働しないということがございます。ICT活用のシステムは、よくよく見ると、あちこちで死屍累々になっていることは、御存じかと思います。

異変通報・把握の確実化を図ると同時に、何かをしなければいけないかという、高齢者さんであるからこそ、遠慮感が非常に強いとか、助けてくださいと言わないようなところがございます。自立といっても、何でもかんでも自分でやるのが自立ではなくて、うまくお願いしませうとも言えることも自立なんだということです。規範、文化を変えるのはとても難しいことですが、必要な仕組みです。

3番目は、ICTのネットワーク化でつながりを再構築する。これがコミュニティづくりに当たるところだと思います。

これをうまくつなげて、社会デザインをしていかないと、ICTだけの活用を考えていても、うまくいかないところです。

先ほどの図の左側に、震災の影響を青で重ねておりますけれども、これは皆さん十分御存じのとおりです。今でも仮設住宅などにおける孤立死とか、自殺だとか、長く続く問題が起きるだろうということは予測されまして、そこは喫緊の課題と言えるかと思います。

私はこの10年ほど、ICTを活用した見守りということで、調査、研究をしているんですが、出発点は緊急通報システムを調査したことでした。

各市町村の方であれば、緊急通報が入っていることは御存じだと思うんですが、これが入りますと、高齢者さんは手を合わせて、これで助かる、ありがたいとおっしゃいます。しかし、調査した結果を右側に書いていますが、長く使っていると、もしかすると、いざというときに押せないかもしれないという不安を、半数の人が感じているとおっしゃっています。

そして、遠慮感が強いので、どんなに苦しくても、緊急ボタンは、最後の最後まで押さない人がいます。

それから、もっといろいろな問題がありまして、ペンダント型の発信器を首から下げないとか、運用側の問題なんですが、95%誤報とおっしゃるんです。見守っている会社は、看護師さんが見ている、緊急状態の体の異変だけを正報とみなしている。夜の夜中に寂しくて、心の訴えで押す方は誤報に入っていたりします。つまり発信をする側が発信をしていることと、受信で受け取る側のミスマッチという運用体制がある。

それから、東京のセンターに転送されると、例えば「あたる」という方言がわからない等々、ここに大変たくさんの課題があることがわかりました。

ですから、私はこれをお守りシステムと言って、見守りとは言いません。

もう一つ、見張り問題がございまして、民生委員さんを調査すると、あなたの役割が見守りだと言われると、どこまで足しげく通っていいかわからないんです。足しげく通うと、高齢者さんから見張りだと言われます。そのミスマッチの問題があります。

ここを解決していこうということをいろいろ考えた結果、できたのがおげんき発信というものです。おげんき発信だけで全てが解決できるわけではないのですが、おげんき発信

というのは何かというと、緊急通報は異変が起きたときに押すものだとすれば、その反対です。今日も元気で無事に暮らしていますということを、毎日定期的に知らせる仕組みです。

20年間緊急通報システムを使っても、1回も押したことがない人がいます。1回も押さないうちに認知症になりまして、この機械が一体何なのかわからなくなっている方の家に緊急通報が入っています。

おげんき発信は毎日押すので、多少認知レベルが落ちてきても、この10年間ずっと使い続けてきた方の事例を見ると、使います。

それから、おげんき発信ができなくなるということは、認知レベルが下がったということの予知にもなります。

ですから、発信する内容は、能動的、自分で押すんですけども、緊急通報の裏側だと考えてください。

それでは、ここで1回スライドショーを切ります。申しわけありません。映像を見ていただくのが一番早いので、地域のテレビでつくったものですが、わかりやすいので、ごらんください。

(映像が流れる)

今、画面には出てこなかったんですけども、これは登録をしたところにメールを飛ばすこともできます。高齢者さんが自分でメールを打てない方の場合、別居の親族だとか、民生委員さんだとか、お隣の人などにメールで、小川晃子さんが何時何分に元気と発信しましたというのが届くので、さまざまな人が一緒に見守りをすることも可能になっています。

そんなことを進めてきまして、黄色い旗の問題は、郡山でも取り上げた仮設段地があるかと思いますが、これとICTのおげんき発信は違うということがわかりだと思えます。同じように、元気ですと旗は立てるんですけども、外の人に見えない。だから、詐欺的商法の餌食にもなりません。

それから、これはいつ何時に掲げたかわからないので、前の日からずっと掲げていても、中で孤立死していても、外の人が気づかなかったりします。ICTの場合は何時に発信したというログが残りますから、それによって確実に24時間1回見守りができます。

インターネットを使って社協さんが見ていて、午後になると、発信してこない人には電話かけをする。ほぼ95%自己発信しますので、残り5%に確認をすると、大体忘れていましたということです。どうしても見つからない人は、あらかじめ登録をしている人に連絡をして、足を運んでいただくということで、24時間に1回必ず安否確認できるので、突然死は防げませんが、孤立死は防ぐことができるという仕組みでございます。

岩手県と青森県で、徐々にいろんな取り組みを進めてきました。今は時間がないので、詳しい話はしませんが、10年前に始めたときは、Lモード電話機というもので、タッチパネル、今でいうタブレットと同じようなものを、高齢者さんが使うというところから始めま

した。そのときに得た知見がタブレットとかスマホになって、今、また活用できるようになってきています。

先ほど画面で見ていただいた岩手おげんきみまもりシステムは、第2次で、特別な端末は一切なしでできます。福島にいらっしゃる方も、登録をすれば、使える仕組みでございます。

その後、第3次と言っているのは、おげんき発信を使って、ICTを活用した生活支援型のコミュニティづくりをしていこうという実験を、科学技術振興機構から研究費をいただきまして、平成22年から25年まで3年間続けてまいりました。今、それが終わったところです。

何をしたかというところ、図のピンクのところですが、先ほど私が整理をしたように、おげんき発信、緊急通報、センサー、それぞれに意味がございます。これが地域の中で個々ばらばらに、それぞれ適用しない人に使われているという問題を解決していこう。元気な人は早くからおげんき発信を使ってもらい、体が弱くなったら緊急通報、認知レベルが下がったり、視聴覚が弱くなったらセンサーをという使い分けをすると同時に、その情報を地域のネットワークの中で一元化していこうということです。

それから、左側の黄色いところですが、市町村社協さんのみまもりセンターだけではなく、夜間・休日のセンターをつくるとか、地域の状況、コミュニティの状況に応じて、さまざまなサブセンターを地域につくっていくという実験をしました。

一番下の学生ボランティアセンターは、我が県立大学のボランティアセンターが地域の人を見守るというセンターですし、包括支援センターだとか、特養だとか、集合住宅・マンションの集会所でもいいということで、いろいろやってみました。

詳しくは話す時間がないのですが、そうやって実験をしてきて、非常に大きく変わったのが、県立大学のある滝沢という村です。1月からは市になりますが、人口5万の村でございます。そちらでの動きです。

ここは、みまもりセンターは、社協さんと、県立大学のボランティアセンターと一緒に作ったプロジェクト室、緊急通報という大学のセンターの3つをつくりました。

どんな取り組みをしたかといいますと、これほどこでも応用できるんですが、高齢者さんたちのつながりをつくるために、おげんき発信と一緒に始めた仲間でのサロン活動というものが1つあります。

緊急通報は、先ほどお守りシステムと言いましたけれども、これはこれで意味があるので、この空きボタンを「げんき」に変えました。これは福島に本社があるアイネットさんが、私どもの大学の隣に岩手の出張所を出しましたので、そこをお願いをしまして、相談ボタンの電話番号をおげんき発信のサーバー、コンピュータ、ロボットさんに登録をし直していただいたという形でございます。これはワンプッシュなので、朝起きて元気だったら「げんき」、悪かったら「緊急」を押してくださいというお願いをしました。これはとても簡単に押せるので、緊急通報のように忘れることもなく、毎朝これを習慣化すると、

知的な障害がある方なども毎日確実に発信が可能です。認知レベルが下がってきている方にとっても、一人暮らしの限界まで支援する機器になっております。

生活支援というのは、おげんき発信をしばらく使い続けた後で、5番目として、頼みたいボタンをつくりました。買い物に行けなくなった方が、カタログを見ながら、みそだとか、豆腐などを滝沢社協さんに頼みます。それを地元のスーパーさんでそろえて、まごころ宅急便といまして、ヤマトさんが集荷をして、1箱500円取りますけれども、配達をしながら安否確認をし、現金の受け取りをします。

おきげん発信の弱点は、どんなに苦しくても、毎日「げんき」を押す人が一定数いるということです。これも遠慮感が強いからです。そういうところは、ヤマトさんが行って、対面で少し質問をし、様子をうかがうことによって、例えば傷があったとか、熱を出していたということがわかります。見守り報告をファックスでやるという仕組みです。

社協が買い物支援をすることの意味は、認知レベルが下がった方の買い過ぎ防止や、朝発注して、夕方には発注を忘れていたときの対応の福祉的な意味がございます。

あとは、私どもの大学の近くの川前地区というところの取り組みです。詳しくは、今日配りました広報誌に写真などを入れてありますけれども、県立大学ができたときに、まず孤立死が問題になったのは大学生でした。毎日出てこなくても、大学生の場合、誰も何も思わないんです。そうすると、不動産の価値が下がるということで、大家さんたちがネットワークをつくって、滝沢駅前安心・安全の会というものをつくりました。買い物支援は、学生が最初は支援を受けていたんです。

そこから始まって、学生が地域の方と一緒に交流の会を始めたり、チャリパト隊といまして、授業の合間に地域を見守る防犯活動をしたりということをやっておりました。そこに私どものプロジェクトが入って、民生委員さんとともに、高齢者さんの見守り支援、おげんき発信などをしながら広げていき、そこにローソンさんが、おなじみさんの買い物支援、配達や送迎をしているということを知りつけて、会に入らせていただき、配食とか介護タクシーなどをつなげていきました。

川前地区高齢者支援連絡会という活動をやっておりまして、生協の買い物バスのルートの変更をお願いするとか、見守り拠点をつくるとか、さまざまな活動をしております。

詳しくは、広報誌をごらんください。

こんなことをやってきて、調査をしてみると、おげんき発信によって、高齢者さんは見守られる安心感とか、自分が発信できる自立の有用感を非常に感じています。

民生委員さんも自分たちの負担が軽減したと答えていますし、取り組みの評価もしてくださっています。

そんなことをやっていて、第3次を始めてすぐに東日本大震災、岩手ではそこに津波とつけますけれども、これが起きました。

被災地におけるということを考えてときに、被災地の生活支援は社会資源が乏しい。それを先ほどの第3次の形に、あるものを使って当てはめてみるモデルをつくってはどうか



ということで、たまたま縁があった5つのフィールドにお願いして、さまざまな体制をつくりました。

野田村は、青森県社協さんと一緒に、ワンプッシュの緊急とおげんき発信を一緒にしたものを入れております。

宮古市の田老というところでは、診療所の先生が、自殺念慮の高い方たちの見守りに使いたいということで、最初は田老の診療所がみまもりセンターになっての取り組みをしましたが、この先生がいらっしゃらなくなってから、遠隔地である県立大学が見守っています。いざというときに駆けつけの手がないので、そこは買い物支援をしているNPO法人さんと組んで、全体の支援構造をつくっております。

釜石市の鶴住居というところでは、岩手医大の先生たちと組んで、血圧をはかるという遠隔地で見ると仕組みを、サポートセンターに取り次ぎをお願いしまして、お医者さんのコメントをサポートセンターが届ける、そして、受診を誘導するという医療・福祉の連携をやっております。

それから、センサーは、電力中央研究所に連携をいただいて、電力を使った、使わないというところから、異変を把握する仕組みをあわせて使っています。

着信確認のおげんき発信を使い、自己発信プラス仮設を見回る住宅団地連絡支援員さんたちと、ほかの人から見ての見守り情報を同時にタブレットに入れていく。自己発信と他者発信をあわせて、地域全体に網かけをして、孤立死を防ぐという社会的な仕組みもつくり上げました。

これはそれぞれの詳しいあれですけれども、これなども、センサーに緑のボタンをつけてもらって、おげんき発信とセンサーの一体型になっています。こんなふうに併用していくことにとっても効果があります。

タブレットは、支援員さんたちもほとんど高齢者さんなので、ここもまたリテラシー支援の問題になってくるんですが、非常に丁寧に説明をしていきながら、ワンタッチで押せるような仕組みをドコモさんと共同研究でつくっていただいています。

仮設団地の中で、今日ここは人がいたというところをぽんと押す、相談を受けたというところをぽんと押すという形になっています。

私はこういう取り組みの中で、福島と縁がちょっとだけありました。発災後1カ月半のところ、先ほど申し上げたアイネットさんから、飯舘で避難をする方たちに緊急通報のかわりにらくらくフォンを渡す。そのときに、緊急ボタンを赤にするんだという話を聞いたので、緑でおげんき発信をつけて、一緒に見てくださいというお願いをしました。これは50台ぐらい持って出られて、先日まで何人か使っていたらいいなと思っていました。

ただ、アイネットさんの運用は、大変きめ細かく、緊急の方には電話かけをしょっちゅうされるということもあったり、緊急通報を使う方というのは、高齢者さんで、だんだん弱っていきますので、利用者さんが当然減ってくることがありまして、ほかのタブレットに置きかえられたということもあるようです。今は役割を終えておりますが、これはこれ

で高齢者さんの携帯電話に「緊急」と「げんき」を入れることの価値を確認したところでございました。

それから後、ことしになって、スマートフォンによる見守りが起きました。

これも映像を見ていただきます。

(映像が流れる)

先ほどスマートフォンを使っていたフナコシさんという男性は、ガラケーを飛び越えて、スマホを使ったんですけれども、私どものゼミのカワジリという学生がついて、一つ一つやりましたら、ちゃんと使えて、いいということで、今もスマートフォンを持っておりまして、使っています。

そういうことをしてまいりました。

あと5分ぐらいで終えたいと思うので、まとめに入りますが、先ほど最初にお示したここから始まって、私がいろいろやってきた1つは、緊急通報とおげんき発信を一体化すると、緊急通報の曖昧なところもとても役に立つんです。

それから、おげんき発信とセンサーの一体化もやってみると、それはそれでとても使い勝手があるんです。

これはいいと思っていましたら、スマートフォンというのは、結局、能動的発信、受動的発信、平常、異常、実験の中の機能を合わせると、これだけ全部入っています。これだけ入っているから、うっとうしいということも見守り社会では言われるので、それぞれ自己選択です。その人の体や生活の状況に合わせて、機能を組み合わせて使っていく時代に入りました。

さらに、今、テレビで見守りということとか、さまざまな商品が出ています。それは一定使用量とか、一定の行動を通知したり、異常行動、例えばスマートフォンだと1日中使われていませんということを検知したり、できるようになっているからです。

今は多様なデバイス、テレビ、スマホ、あるいは普通の電話機でやっているおげんき発信などを使い分けて、それを地域の中でネットワーク化していく。幾ら遠くの家族が何かおかしいと思っても、近くにいる助けに行く人とそこが繋がっていないと、何の意味もなくなりますので、そういう時代に入ってきたわけです。

岩手においては、そんなことから、さまざまなICT活用の見守りネットワークのポータルサイトをつくらうということを、今、提案しながら、動き始めているところです。

また、医療・福祉における見守り、血圧測定やみとりのときの問題とか、あるいは自殺予防の問題などを、医療・福祉の連携でやっていこうということも、一方で進めております。

見守りの部分は、先ほど御説明してきたので、おわかりだと思っんですが、特に福島の広域避難者のことを考えると、他者の見守りということだけでは、手厚くできない部分がたくさんありますので、自己発信とか自動発信をうまく取り入れていくことが必要になってまいります。

そんなことで、私の研究では、ICT活用といっても、基本は自立支援の部分を大切にすることがあります。

異変把握ということであれば、単に緊急通報があればいいということではなく、24時間に1回の安否確認は保障するんだといったような、現実性をどこにもっていくのかという検討が必要になります。

ICTを活用していると、先ほども言いましたように、認知症ではないかとか、自殺念慮が強くなっているのではないかとか、さまざまなことが、つながりの中でわかるようになりますので、その対応は、地域の福祉とか医療のネットワークが必要なところでございます。

こういうことをやると、民生委員さんとか、見守りの役割を持った方の不安感は軽減しますし、4番の話したいボタンとか、5番の頼みたいボタンを使って、生活支援策との連携も可能になってきて、そこがコミュニティづくりにつながるところでございます。

今まで福島でもタブレットを使ったコミュニティ形成がやられていたり、いくつか使われているということは、私も少し調べさせていただきましたし、また、その利用率が非常に低いということが課題とも伺っております。そういうシステムの中には、能動的なおげんき発信がないんです。そういうものを入れて、最初はそこから始めていくと、使うことの価値がわかるし、自分が発信しておけば、周りの人に心配かけないんだという遠慮感を払拭していくという手順を経て導入をしていくことが、とても大事なことです。

先ほどの飯館のものは、岩手県システムです。急遽50人は岩手のサーバーを使ったんですけども、何人かお試して使うということであれば、岩手県社協に私がつなぎますので、可能でございます。電話番号の登録さえすれば、次の日からどこでも使えます。

それから、先ほどから説明しているように、既存のシステムが非常に多様になってきています。今、配られているタブレットでも、最初におげんき発信をぼんと浮かび上がらせるようにして、加えて「げんき」と入れる方法もあると思いますので、そこは相談すれば、いいアイデアも出てくるのではないかと考えています。

広域避難をされている方を見守るにしても、地域で見守るにしても、とにかく24時間に1回漏れをなくすためのセンター機能は確実に必要で、これは私が実験してきたように、社協でも、包括でも、仮設のサポートセンターでも、あるいはマンションの1階の管理室でも、要するに地域がやると言えばできるんですけども、みまもりセンターをつくる必要はあります。

それから、みまもりさんと言っていますけれども、見守る側です。スマートフォンの実験のときも、高齢者さん同士で相互に見守りをしましたら、とてもよかったということがあります。広域避難をして、同じ地域の方同士が見守っていくということも、またコミュニティづくりにつながります。

先ほどから言っていますが、おげんき発信、緊急通報、センサーは、それぞれに特徴がありますので、これを使い分けていく福祉的、ソーシャルワーク的な機能も必要です。い

ずれにしても、地域のネットワークの中で、その情報をきちんと管理する必要があるんですが、もともといらっしゃるコミュニティと避難先のコミュニティとが、ICTであれば情報共有することが可能ですので、両方が閲覧できるポータルサイト的なものをつくってあげば、解決をするのではないかと思います。

情報リテラシー支援ですが、Lモード電話機というタッチパネル型のものから始めたときに、川井という山間僻地では、字が読めない方もいらっしゃいました。学校に行っていないという方には、絵文字をつけるということで対応した経験もございます。わかりやすい色・デザインを使うことも必要です。

今、配られているものを見ると、高齢者さんたちから見ると、いろんなメニューが入り過ぎていて、簡単な情報発信から始めて、自分で発信することの喜びを実感できるところから始めないとだめだと思います。発信する効果、つまりおげんき発信だったら、こうやって私が発信を忘れていて、電話がかかってくるんだという、見守られる仕組みや見守られる安心感、価値を実感させなければ、次につながりません。

そして、受信する楽しみも必要です。Lモード電話機のと看に、画面に100文字ぐらいの日がわりの挨拶を、元保健師さんがとてもいい文章をつくってくれました。単に毎日おはようございます、今日は何日ですという、ビジネス的なことを入れても、生活者は喜びません。歳時記のようなものをつくることによって、コミュニティづくりはスタートするのではないかと思います。

それから、サロンもやってきたという話をしましたが、一緒に取り組む仲間をつくる。

先ほどの学生のボランティアがやっていたように、身近な支援者がゆっくりと何回も説明をし、支援をする。

そして、使い方がうまくいってきたら、慣れたところで、Lモード電話機のと看もそうだったんですけども、半年に1回ぐらい、新たな機能を段階的に追加していく。先ほど言いましたように、4番の話したいボタン、5番の頼みたいボタンも、後になってつけたから使えるんです。そういう支援を順次し直していくことも必要なことではないかと考えております。

すみません、少し時間を過ぎてしまいましたが、私も皆さんの支援をできればありがたいと思っておりますので、今後ともよろしく願いいたします。御清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会 ありがとうございました。

御意見、御質問は、後ほど意見交換の時間を設けておりますので、そちらでお受けしたいと思ひます。

続きまして、富山インターネット市民塾推進協議会の事務局長、柵様から、ICTを活用したコミュニティ形成の具体事例ということで、話題提供をいただきます。よろしく願いいたします。

○柵氏 皆さん、御苦勞様です。富山から参りました、柵と申します。

今からお話させていただくのは、皆さんにとって、今すぐにはできないかもしれませんが。ただ、これから5年、10年という中で、少しでも何かのきっかけになれば、ヒントになれば思ってお話させていただきます。

小川先生のICTの話は、私も横で聞いていて、とてもシンプルで、密着して使っていくためのお話で、私もとても参考になりました。

加えて、私の話は、福島だけではなく広域的にいろんな地域と一緒に何かをやるときに、どんなことが役に立ちそうかということをも事例として集めたものです。

4つほど御紹介します。最初に子供たちが学ぶe-手仕事図鑑、学校と地域でつくる防災・福祉コミュニティ、3つ目が高齢者の地域参加を促すICTバリアフリー、ふるさとを伝える高齢者の出番づくりということをお話していきたいと思います。

最初に全国から子供たちが学ぶe-手仕事図鑑です。これはふるさとの伝統、職人の技と心を学び、子供たちの職業観を育てるということを目指して始めたものです。

ここにイラストがありますが、一人一人職人さんを尋ねて、こんなイラストを描いた人がいらっしゃって、そのイラストで学習活動に取り組んだのがきっかけになりました。

このようにして、イラストや、映像を事前に部屋の中でみんなで調べて、話し合っ、それから出かけて行き、職人さんに仕事の大変さですとか、取り組んだ経緯を子供たちが記者になってインタビューする。それを持ち帰ってきて、まとめて、みんなでそれを記事にするという活動です。その過程の中で、いわゆる職業観を学ぶ、ICTの活用方法を学ぶ、インターネットを通して協調学習するという狙いを持っています。

実際の職人さんからいろいろと話を聞くのですが、行く前に考えていたことと随分違う、どんなことが違っていたのか、どんなことを改めて発見したのかということを取材して、持ち帰ります。それをまとめて発信します。

職人さんはもちろん地域にいらっしゃると思うんですが、「私の地域にはこんなすごい人がいる」、「おばあちゃんが生まれる前からずっと続いている」、「そういう仕事があるんだ」、「人に喜ばれる仕事をしている人がここにいる」ということを、改めて子供たちにも見てもらって、私のふるさとには、すばらしい人がいるということ、いま一度、考えてもらいたいと思っています。

全国のいろんな地域で図鑑を作り、みんなで共有して使い合うということをやっています。

実際のウェブ上では、このようになっています。

富山でこれを始めたのですが、現在、和歌山、熊本、広島、神奈川、高知、福島、いろんな地域からの発信があります。

この中には、実際の職人さんの取材をした映像と、その職人さんがこれまで培ってきた技術のこと、職場の音や、先ほどのイラストを教材として入れてあります。その教材を使って、子供たちにどんなふうに学んでいただくのかを、指導要領のような形で中に入れてあります。例えば福島の伝統工芸の職人さん取材して、子供たちが学んだことをほかの

地域でも使えるようにということで、このような形にしてあります。

お手元にチラシをお配りしましたが、その内容を少し御紹介しております。

これまで8年ほどずっと続けてきておりまして、取材をした職人さんは全部で70人ほどの方がこの図鑑の中に入れてあり、その中で子供たちに学んできていただきました。その様子を2年ほど前に福島の方がごらんになられて、ぜひこの地域でもやってみたいという方がいらっしゃいました。その方は、今は大変な状況だけれども、これから10年、20年先のことを考えて、子供たちが社会に出るまでに、ふるさとのことを学んで、つながりをつくってほしいということを願っていらっしゃいました。富山に来ていただいたり、私からこちらに出かけてきたりして、一緒にどうしたらいいかということを考えてきたのですが、ようやくこちらにあるデコ屋敷の職人さん取材して、その教材を開発したところまではいいのですが、当時はこの教材を使って、子供たちが体験学習に行くという状況ではなかったということを聞いています。

昨日もその方もいろいろとお話をしたのですが、この2年間、とにかくいろいろなことをやったのですが、結局、挫折感しか残っていないとおっしゃるんです。この地域の中ではなかなか仲間づくりができない。それは進め方の問題もあるかもしれませんが、学校現場も大変な状況だということもあって、そういう協力がなかなか得られないということをおっしゃっていらっしゃいました。1人でやるには難しいのではないかと。いろんな仲間を集めて一緒にやったらどうかと話をしています。私たちもできることをしたいと思っています。

全国にはこちらから避難された子供たちがいらっしゃいます。富山にもいらっしゃっています。そういう子供たちが、今は離れていても、福島の手仕事をインターネットを通じて学んで、ふるさとはこんないい人がいる、こんなすごい技術があるんだということをもう一度、学んでほしいと思います。

これが手仕事学習の事例でございます。

2番目は、神戸の震災当時、私も3年ほど応援に行っていましたが、その中で生まれた1つの活動を御紹介します。

地域の防災マップをつくろうというときに、行政が防災マップを作って配布するというのではなくて、地域の住民の皆さんでつくっててくださいということです。防災マップのつくり方の大変詳しい手引書が配付されて、各地域ごとに、町内ごとに、それに組み込むということをされていました。

全部で109の地域で防災マップをつくりながら、住民の方が、この地域はどういうところが危ないのか、何かあったら、お互いにどう声をかけ合うのかということ話を合っくったと聞いています。

活動を少し発展させて、ジュニアチームというものができています。モデルとなっているのが、神戸市北区のひよどり台の地域ですが、学校で週1回時間をとって、自分たちで町歩きをして、子どもたちの目線で、どういうところが危ないのかということデータを

まとめ、それを自分たちで防災学習という形でまとめて、学校でつくったものを各家庭の親に見ていただくという形で、配信をされました。それを見た親から、例えばこんなことがある、もっと一緒に考えようという話が広まって、子供たちの活動が、地域の住民の活動に非常に密着して広がったという例でございます。

ジュニアチームは、小中学生140人ぐらいで構成されていると聞いていますが、月例で防災訓練をやりながら、このマップをさらに発展させていると聞いております。

子供たちが参加して、親も参加するということで、住民の参加が非常に進んでいると思います。

こういう学習は、神戸だけではなくて、ほかの地域でも学びたいということで、このスライドにあるように、富山と神戸の両方でお互いに学び合っています。今月、この自治会でこんなことをやった、そのときにこんなことが挙げたということをお互いに共有し合って、そして、防災の活動、コミュニティを盛り上げていこうということに取り組んでいるところです。

離れた地域の活動の様子は、わかりにくいんです。私も富山に住んでいて、神戸でどんなことをされているかということが見えにくい。それを少しでも見えるようにしていこうということで、こういう仕組みを使っております。

地元の神戸の中では、最初に行政が地域のコミュニティを応援して、その地域のコミュニティの中で学びを開発して、学校はその学びの機会を保障する。それがまさに生涯学習としての防災学習につながっている。子供たちにとっては、10年、20年という中で、学び続けていくという大事なことがあるので、そういう意味では、生涯学習という捉え方が必要だと思います。

3番目ですが、高齢者の地域参加を促すICTバリアフリーです。これは先ほどの小川先生の話の中でも、随分感じることができます。

特に高齢者はひきこもりがちになります。70代、80代は、ひきこもりによる認知症も含めて、罹患をしていく率が非常に高くなっていきます。データでも示されていると思います。そういう方にどうやって町中に出ていただくか、あるいは人とのつながりを持っていただくかというのは、大変大事な問題だと思います。

高齢者には本当はたくさんのお番があると思います。ふるさとのことというのは、お年寄りほどよく知っていると思います。

先ほどの手仕事もそうなんですけれども、昔から続いていることは、なぜそこで続いているのかということは、そこにずっと住んでいらっしゃる方が、一番よく知っているのではないかと思います。ですから、そういう高齢者の方の知識とか、記憶にあるものも、生かさせることができるのではないかと思います。

子育てもそうだと思います。おばあちゃんの知恵とか、いろいろあると思うんですが、こういうことを生かしていこうと、仕組みをつくっています。

1つの例ですが、この人は60歳になってから、少しずつICTのことを学び始めたんですが、

70歳のときについて自分の会社を起し、今75歳で大学の3年に編入学をされて、80歳になるときに大学院を出て、また次の事業を始めたいと、学び続けているんです。

この人のモチベーションは、自分がやってきたことが、人の役に立つということに、あるとき気付いたそうです。きっかけは、インターネット市民塾の中で講師をされたことです。インターネットを通じて集まってくる方は、初めての人ばかりなんですが、そういう方から、いろんな意味で自分の知識を生かす道があるということ、逆に教えてもらった。それをさらに発展させて、事業に結び付けたとおっしゃっています。

高齢者の方々を集めて、3年ほど前から、シルバー情報サポータ活動をやっています。これはひきこもりをしないように、町中に出ていただくようなきっかけづくり、ICTは先ほど小川先生がおっしゃったように、簡単なものから少しずつやっていくのはいいんですけども、新しいスマホを見ると、新しいものはだめだという先入観をどうしてもお持ちになりがちなんです。そういう先入観を少しずつ和らげるために、いろんな工夫をしています。

これは先ほどのアプリの開発と同じような形ですが、字を大きくして、操作もシンプルにしてやっていますが、バックにあるのは、世界中で使われているツイッターです。ツイッターを非公開型で使っていて、高齢者の皆さんにつぶやきをしていただくんです。これは先ほどの元気か、そうでないかというシンプルなボタンのやり方よりは、多少難易度が上がるかもしれません。文字を打ち込んだり、あるいは声でふき込んだりということがありますが、今、動けるお年寄りの人、今、動いている人がひきこもらないように、病気にならないように、そのことに私たちは焦点を当てて、こういう仕組みをつくっています。

町の中にも、高齢者の皆さんが元気に活動している様子をディスプレイで紹介したり、あるいは出かけたときに、そういえば、この情報を見た、この施設でこうやっているんだということがちゃんとつながるように工夫をしています。

先ほどの75歳の方だけではなくて、教えることが最高の学習になるということは、私たちは随分見てきました。画面に向かって右手の方が教えている側ですが、教える側とお年は全く変わらない。どちらが上かというぐらいですけども、普段、シルバー情報サポータ活動で教えていただいているお年寄りが、今度は隣の町に行って教えているという様子です。教えることによって、自分が今まで学んできたことを改めて確認をして、こんなふうに役に立つことができるんだということを再確認して、そして、また出かけていこうということで、進めているところです。こんなきっかけはとても大事だと思っています。

高齢者の方にアンケートを定期的にとっているんですが、このグラフにあるように、新しい仲間ができて交流が広がった。もう一つ面白いのは、適度な間合いを持って交流できる、人との関わり方が楽になったという声を聞きます。直接面と面を向かって話がしにくい、あるいはいろんな形で窮屈だという方もいらっしゃると思うんです。特に人生を長く続けてこられた方にとっては、考え方の違いなどがあると、なかなか難しいこともあると思いますが、適度な間合いを持つのにICTが役に立っているというデータだと思っています。



もう一つは、人との交流に積極的になったことが挙げられています。先ほどのスマートフォンを使い方を覚えるのに、1人ではわからないんですが、一緒に来ている隣の人とお互いに教え合う、学び合うことがきっかけになって、出かけていこうということにつながっていると思います。新しいことを覚えるのに、友達をつくるのが何よりだとシルバーの方はおっしゃっています。友達がいないと、新しいものにどんどん手を出さなくなるんです。ひきこもっていくんです。認知症などになっていくと言われているんですが、こういうちょっとした道具、スマートフォンが目的ではなくて、道具だと思っています。つぶやきを通じて、適度な距離感の中で話をする。そして、教え合いをするために出かけていく。友達ができる。できるので、相手に直接かかわらず、自分の生活のことも含めて、気軽に交流できるんだと思っています。

もう一つ、事例です。ふるさとを伝える高齢者の出番づくりということで、富山で数年前からやっている町歩きです。江戸時代の地図を持って町歩きをして楽しんでいます。富山は戦争で見事に焼け野原になった地域で、昔からの面影が全くなくなるぐらい、焼失してしまっているんですが、そういう中でも、かつての江戸時代の町並みがきつとここにあったはずだ、あるいは大正時代にこんなはいからな地域があったんだということを、みんな学び合います。

こういう地図を最初は持って回っていたんですが、それをデジタル化して、四次元マップというものをつくって、町歩きをしようということ、今年始めました。これはいわゆるグーグルマップというか、インターネットのマップの上に、江戸時代、大正時代の地図が重なって表示されるようになっていきます。ですから、今、町並みのところは、昔は川があって、その川には柳があって、風流なこういうことがやられていた。あるいはここから先は武家屋敷になっていて、こんなことがやられていたということ、地図の上に表示をして、学び合うという活動を始めています。

このときにおもしろいことがわかったんです。参加してくださったのは、20代から70代まで非常に幅広かったんですが、一緒に歩いて行くうちに、年輩の方がこのタブレットを見ながら、私の若いときにはここにこんなものがあったんだ、先代からこんなことを聞いたということ、いろいろ教えてくださるんです。その情報というのは、紙に書いたものはないんですが、その方の記憶に残っている大事な情報だと思います。その情報をもとにして、いろいろ調べたりして、この地図を更新していくということ、今、少しずつ始めています。このときに、高齢者の記憶が大事だと改めて思いました。

こういう活動は、地域の外からもいらっしゃいますし、インターネットを通じて参加することで、富山を離れた方、富山出身者の方も参加をするということも少し見られるようになりました。

4つほど事例を御紹介しましたが、いずれも学ぶということ、コミュニティを育ててきた活動です。学ぶということは、即効性があるかどうかはわかりませんが、人と人とのつながりをつくるために学ぶということは、とてもいい方法だと思います。人

から教えていただきたいことは、ずっと忘れないことではないかと思います。それから、世代を越えて学び合うこともありますし、地域を越えて学び合うこともあると思います。

富山のこういう活動のベースとなっているのは、インターネット市民塾というものです。市民が自分たちで知っていることを教え合う仕組みを15年ほど前からつくって、こういう活動を進めてきました。その中で、育っていった方が、先ほどのような活動を少しずつ立ち上げてきたという経緯があります。

この仕組みを立ち上げたときの私の問題意識は、働き盛りの方が学んでいないとか、学校を出た若者がニートの状況がふえているとか、あるいはシニアの方の経験や知識が活かされていないという問題意識もありましたが、こういう皆さんに集まっていただくための仕組みとして、先ほどのようなインターネットを使った仕組み、市民が講師になる仕組み、活動を広めていく学びのフリーマーケットという形で作ったのが、先ほどのインターネット市民塾の仕組みです。

こんなふうにして、家からも気軽に学べますし、現場に行って話をして学ぶこともあります。

参加者の年代状況ご覧のとおりで、一番多いのが40代、50代です。30代までは女性が多くて、それ以降は男性が多いグラフになっています。15年前は50代、60代は本当にわずかしかなかった。この5～7年間の間に、50代、60代、70代の方の参加がものすごい勢いで増えています。つまり退職をされて、それまで現役でパソコンを使っていた方がふえたのではないかと思いますし、特に男性の参加が非常に多いということは、すごく注目しているところです。

福祉関係の方からすると、60歳を越えて、あるいは70代になって、ひきこもりの割合が多いのは男性だと言われているんです。女性よりも男性がひきこもるといのは、統計的にも出ているんです。そういう方が町中にあるいは人とのつながりをつくるということは、病気の罹患率の問題からしても、とても重要なテーマだとおっしゃってしまして、そういうことに注目していただいて、先ほどのように、富山の中でもいくつか別の地域からもタブレットを使った仕組みをやりたいという方がいらっしゃっています。

市民講師は、こんなふうにして、お互いに学び合ったりしています。市民講師自身は教えることが楽しくなる。

この写真ですが、後ろにいるおばあちゃんは、画面を見ないで、市民講師のほうを楽しそうに見ていますけれども、それぐらい楽しそうにやっています。自分の知っていることを役立てて、それが生きがいになったり、やりがいになったりしているんだろうと思います。

そういう人たちをたくさんつくっていこうということで、地域みんなが学芸員になって、それぞれの地域の中にあつた文化、歴史、生活、記憶の中にあるものをみんなですこすこ発信をしていこう。ネットだけではないんですが、ネット上に地域の文化とか、歴史とか、人々の生活の息遣いみたいなものを少しずつ残していこうということで、活動を続

けています。

皆さんに共通するモチベーションは、教えることを通じてみずから学んだとか、あるいは自分がかつて苦勞してきたこととか、経験してきたことが、役に立つことがあるんだということに気がついた。それまでは余りそういうことに目を向けなかったけれども、教えてみようという気持ちになった方が多くおられます。

こういう仕組みの中で、特に最近力を入れているのは、出番づくりということを進めています。今まで学んだこととか、経験したことを形にしていこうということで、今日はチラシをお配りできませんが、今、ちょうど活動を始めているところです。学んだこと、経験を生かして、地域づくりに役立ててみませんか、出番づくり応援プログラムというものの開発を、今、始めたところです。

このように、地域の映像を少しづつ残して、地域の中にはケーブルテレビを通じて発信をしています。地域外にはインターネットを通じて発信をしています。そうやって、地域にいる方だけではなく、離れた方もふるさとの様子を、ふるさとの映像を通じて見ていただけるようにしています。

同じように、先ほどの手仕事もそうですけれども、全国の仲間で行ってきた仕組みとして、若者未来eラーニングというものがあります。これはチラシをお配りしていますが、いわゆるニート、フリーターの状況にある若者たちに、社会にもう一度チャレンジするきっかけをつくるために、作ったコンテンツです。自分探しとか、地域から学ぶとか、人間関係をつくるコースを教材に、全部で70タイトルを配信しています。これも富山だけではなくて、徳島、高知、熊本など、いろんな地域の人たちと一緒につくって、それをみんなで使い合うという仕組みです。

それから、先ほど言いました手仕事クラウド図鑑も、全部で70タイトル、70に及ぶ職人さんを入れていますが、これもいろんな地域の皆さんで作って、全国で共有する。例えば徳島の手仕事、富山の手仕事、同様に福島の手仕事ということで、先ほど御紹介したように、教材が入っているんですが、これを少しづつ増やしていき、各地にいらっしゃる子供たちにも見ていただけるようにしたいのではないかと考えています。

学びをキーワードとして作るふるさとコミュニティ、全国とのコミュニティを育てる仕組みを御紹介させていただきました。

ありがとうございました。（拍手）

○司会 ありがとうございました。

柵さんのお話は、広域的なコミュニティであるとか、ふるさとコミュニティの維持、このためのヒントになるのではないかと考えております。

それでは、意見交換に移りたいと思います。

今、皆さんの自治体でもICTを入れられて、いろいろ使われていると思うんですが、そこでの悩みごとなどもあるかと思います。この場で御意見とか質問がありましたら、積極的にお願いいたします。

○復興庁 復興庁の佐藤と申します。

口火を切るということで、小川先生、柵先生、両方にいくつかお聞きしたいことがあります。

まず小川先生のお話で、1つすごくポイントになると思ったのは、先ほど石田からも話をしましたけれども、皆さんに、今、タブレットを配付はしているんですが、情報の発信が、市町村から情報を発信してもらって、それを見てもらうという使い方が多いんだと思います。そうすると、使わないという形になってしまいうところもあると思うんですが、そこを能動的にやる、行動を起こすというところがポイントなんだろう。それを簡単にできる仕組みが1つポイントなんだろうと思って、非常に参考になりました。そういうことをやることによって、それに触れるきっかけにもなるんだらうという気がします。

先ほど見せていただいた映像などでは、電話を使ったり、非常に簡単なボタンのシステムだったりしていましたが、タブレットなどもうまく使えば、そういう仕組みもつくれるという気がしたので、これはいろんな町の参考になると思いました。

もう一つ、ポイントとしては、みまもりセンターだったり、サロンだったりというお話があったと思うんですが、人と人との実際のリアルな接触というか、そういうところも一緒になって組み合わせることによって、コミュニティというのはきっちり成り立っていくと思います。

その中で、みまもりセンターなどをどう設定していくのか。社会福祉協議会だとか、地域包括センターなどを活用しながらということ、先生は割とさらっとおっしゃられたんですが、そういうセンターをどう置くのかということは、非常に苦労があったという気もしたので、その辺でもし示唆するようなことがあれば、お教えいただきたいと思います。

もう一つ、サロンという話があったかと思うんですが、サロンというのは、頭の中で、具体的にどういう動きをしているのか、どういう活動をしているものなのかということが浮かばないので、もう少し具体的にお教えいただきたいと思います。

これが小川先生に対してです。

まとめて全部言ってしまうと、柵先生に対しては、今回、特にポイントになるのが、福島の方が広域的に避難しているというところです。全国に散らばっているんです。そこにどう対応していくのかというところが、1つ今回の大きなテーマでもあります。

その中で、苦労もあったというお話があって、7ページの資料のところ、神戸のひよどり台のグループと、富山県内でも防災の学習のグループがあって、そういうことをつなげながらやっていくというところでも、1つ離れた地域のことをわかり合うのは難しかったんだというお話があったと思うんですが、その辺の工夫の仕方をもう少し詳しくお教え

いただきたいということが1点です。

もう一点、これは非常に驚いたところだったんですが、17ページで、幅広い世代がインターネット市民塾に参加していて、高齢の男性の参加が多いというのは、すごく衝撃的でした。前に研究会をやったときも、高齢の方は女性のほうが活発に動かれると常識的に思っていた部分があって、それがこういう形が出てきたのは、すごく意外なデータでした。インターネット市民塾で取り上げているテーマみたいなものが、もしかしたら男性に響くようなものとか、そういうことがあったりするのかとか、いろんな想像をするんですが、この辺は男性がうまく活動に参加しているポイントとか、つぼみみたいなものを、お感じになっているところがあれば、お教えいただければありがたいと思います。

以上です。

○司会 それでは、小川先生からお願いいたします。

○小川氏 よくまとめてくださって、ありがたく思っております。

私がやっているのは、とても簡単なボタンを押してということで、タブレットやスマホは次の段階だと受け取れる話の仕方をしてしまったんですけれども、最初におげんき発信をやりました、Lモード電話機の時代があります。Lモード電話機はもうなくなってしまったんですけれども、これは普通の黒ダイヤルの電話を使っていた家が、そのままLモード電話機にすると、インターネットに接続できるという大変便利な機器だったんです。

おげんき発信をやっている中で、仲間でお互いにこれはメールを打てるんだということをお互いに教え合う人たちが出てきまして、数年前なんですけれども、玄関先に置いたLモード電話機で、孫に向けて1文字1文字押しながら、メールを打っている人たちがいました。だから、最初はワンプッシュのボタンであったとしても、そこにいろんなことができるんだという機能が入っていると、今、柵さんもおっしゃったように、お互いに教え合いながら、次の段階と進んでいくのは事実です。そこは余り大きな垣根がないと考えてもいいかもしれません。

質問の件ですけれども、みまもりセンターは、岩手の場合、第2次のシステムで、岩手県社協さんの御理解をいただいて、県全体の取り組みができたことが、とても大きな価値だったと思います。その下に市町村社協さんがいるので、基本的には市町村社協さんごとに社協がみまもりセンターになって取り組んでくださいということで普及を図りました。

今、ゼッケンは1,000名ぐらい使っている状況ですけれども、ただ、困ったことは、市町村社協の中でもやりたくないところがあるんです。今、隣で社協さんが会議をされているので、外に伝わらないようにしたいと思います。お役所の人前で、お役所的と言っただけいけないんでしょうけれども、社協さんもそういうところがあって、9時から5時なら受けられるけれども、夜間・休日、緊急システムではないのに、話したい方が来て、受けられなかったらどうするんだとか、すごく不安を感じられたり、負担を感じられたりするんです。

そんなことがあったので、私のほうでは、第3次の実験の中で、夜間・休日のサブセン

ターを提案してつくったんです。夜間・休日の集約的センターをどこにしていたかという  
と、青森県社協にしておりました。岩手と青森の歴史の違いがありまして、青森はこの20  
年間、緊急通報システムを一括して青森県社協さんがやっているんです。これは福島とも  
大きく違うところですよ。ですから、県社協さんの中に24時間受ける方たちがいらっしゃる  
んです。岩手県側はそれがいないので、そこに転送をして見てもらうという仕組みをつ  
くりました。青森側は、緊急通報とおげんき発信の一体型をつくってビジネスにしているん  
ですが、それを24時間365日稼働する体制ができています。

今、福島も大変な状況ですので、青森県社協さんのように、一括して緊急通報とおげん  
き発信、場合によっては、センサー的なものをあわせて見ていくみまもりセンターがある  
と、とても価値が高いだろうと思います。これを社協さんとか行政が直接運用することが  
難しいとすれば、既に緊急通報を運用されているセンターに機能を付加していくことも、  
1つの考え方だろうと思います。

大きなところでは、そういうみまもりセンターをつくってきながら、日常的生活支援  
型のコミュニティをつくるということでは、お互いに小さなコミュニティの単位で、今日  
誰々さんが発信していないとか、今日誰々さんが体調悪いと発信しているということが、  
わかることも必要なんです。

そういうことで、私はサブセンターという概念をつくって、そこでいろんな実験をして  
きました。先ほどから事例を出しているように、クリニックであったり、包括支援センタ  
ーであったり、学生ボランティアセンターであったり、やる気さえあれば、大きなセンタ  
ーの下に入ることができるんです。

川井村、今は宮古市川井ですけども、こういうところでは、何と民生委員さんが民生  
委員を辞めた後で、自分がサブセンターになるという形で、1人でパソコンを見ていまし  
て、その家業が米屋さんなものですから、米屋として、買い物代行をしています。盛岡  
市に行ったときに、ついでに頼まれた化粧品を買ってくるということをやっているんです  
けれども、それをおげんき発信の頼みたいとあわせて、サブセンターが1人で運用してい  
るところもあります。

そこはさまざまなタイプが可能です。大きなセンターは、大きな仕組みの中できちんと  
つくっておいて、小さなサブセンターは、コミュニティの状況に応じてつくっていくとい  
うのが、いいやり方だと、今の私は感じています。

もう一つの質問ですが、サロンです。サロンは、今、介護保険の財源が足りなくなっ  
てきてまして、介護保険の範囲の中での通所介護、デイサービスだとか、そういうものは  
賄い切れなくなることは明らかで、そういうときに、地域の中で、介護保険ではなく支  
え合う仕組みとして、居場所づくり、お互いにちょっと居場所があって、例えばお茶っ  
こができるみたいな場所をつくっていくといいというのが、サロンだと考えていただい  
ていいと思います。福祉の側では、市町村社協さんの下でサロン活動をされている場合  
もありますし、施設でサロンをやっている場合もあります。

私がおげんきサロンと言っているのは、おげんき発信に取り組んだ人たちをできるだけ束にして、そして、そのときに手伝った、おげんき発信の最初のきっかけをつくった民生委員さんなどが世話役さんをやりながら、負担にならない2週間に1回とか、1カ月1回、お互いに集まって、教え合ったり、お茶を飲んだり、食事をしたり、そういうことをやるのをサロンと言っています。

岩手県立大学がお手伝いをするときには、ときどき県立大学の食堂に食べに来てもらって、看護学部がごさいますので、看護の先生が健康づくりの体操をやったり、話をしたりすると、こういう人たちはすごく喜ぶんです。そんなことで、人間関係をつくっていく。居場所であると同時に、そこが柵さんがおっしゃった学び合いと交流のきっかけです。そんな交流をサロンとしてやっている形です。

よろしいでしょうか。

○復興庁 はい。

○柵氏 神戸との話ですが、もともと私が行っていたという経緯と、神戸市でこういう活動を続けているマツザキさんという方がいます。全国で活躍されている方ですが、そういうつながりがあったのは、もちろんきっかけとしてあります。ただ、こうやって発展できたのは、市民レベルの交流ができたことが大きいと思います。

先ほど御紹介しましたように、神戸で防災マップをつくるときに、マップは自分たちのコミュニティで、自分たちでつくるという、コミュニティを育てる戦略があったんです。そういう意味で、コミュニティづくりの市民レベルの活動が、非常に育っていたということと、あと、富山は先ほど御紹介したインターネット市民塾のような、市民が自分たちで学びの場をつくるという、形は違うんですが、両方の市民レベルの活動がベースにあった。それが私なりマツザキさんなりのつながりの中で、神戸に来ていただいたから、また何かやろうかということで、こういう仕組みを始めたのがきっかけになりました。

いつも思うのは、最初にベースとなるのは行政レベルです。ちゃんときっかけをつくるのは、とても大事なことだと思います。その次の段階で、いかに市民参加をふやしていくか。ここは続けるためには欠かせないポイントだと思います。参加の仕方は、恐らく黙っていても、なかなか進まないんです。いろんな仕掛けをして、この後の質問にもありますけれども、わざわざ出かけてくるような仕掛けをいろいろやっていかないと、なかなか進まないというのが現状の私の認識です。

男性の参加が多い理由は、先ほどデータでお示しましたが、距離感ということがあると思います。女性の場合と男性の場合、やはり感覚が違うのではないかと思います。全く知らない初対面の人といきなり親しくなるというのは、男性の場合しにくい、少し抵抗があるのではないかと思います。それがインターネットというものを通して、少し距離感を持っている中で、少しずつお互いにわかり合うということがあると思います。

もう一つ、市民講師は男性の市民講師が多いんです。教えたくなる傾向があるのが、割と男性が多いんですが、面と向かって教えにくい。いわゆる距離感がある程度必要だ。距

離感があれば、自分の知っていることを教えるという男性が、富山の場合、市民講師で多いんです。そういう意味で、参加が多いんだろうと思います。

それから、先ほど75歳の方を御紹介しましたが、ああいう方が、数は多くないんですけれども、珍しくないぐらい集まっていっちゃるんです。そして、そういう方に刺激されて、70歳を過ぎても、これからが青春だぐらいの気持ちで、学び合う方も出てくるようになりました。

先ほど言いましたように、男性で非常に重視している、罹患率、ひきこもりを防ぐためにも、タブレットとか、スマートフォンはどちらかという道具です。きっかけです。本当にきっかけづくりです。小川先生がおっしゃったように、実際に富山でもサロンを月2回やって、そのサロンにだんだん来られるようになると、ひきこもりから少しずつ脱却できると思います。

○司会 どうぞ。

○富岡町 富岡町役場です。

今、ちょうどタブレットの利用率の話が出ましたので、私からもお話を聞いてほしいと思って、マイクを持ちました。

私ども富岡町も、今回の震災で、住民の方々に情報を提供するために、タブレットの構築をしておりますが、稼働率は余り意識をしないようにしています。これには理由がありまして、今、いろいろな情報ツールがありますから、例えばタブレットとか、携帯とか、パソコンとか、先ほどもちょっと話が出ていましたけれども、その中の道具として使っていただければいいということです。

一方、高齢者の方です。私どもがタブレットをつくる際は、やはり高齢者を意識して、ボタンを大きくして、わかりやすいように、少しでも皆さんに使っていただきたいと思いながらやっていたんですが、例えばこれを使わなければならないという機能は、絶対に入れてはいけないと思います。例えば情報提供に関しては、新聞とか、テレビとか、いろいろな方法があります。その中の1つのツールとして、お使いになれる方に使っていただければ、とりあえずいいのではないかと。

今の私どもの考え方というのは、50年先では違います。50年後だと、今の若い人は、パソコンとかいろいろ使っているから、情報弱者はだんだん減ってくると思います。今の段階だと高齢者は情報弱者だから、タブレット、タブレットという形にしたいかと思っています。

せっかくマイクを握ったので、もうちょっと話させていただきますと、先ほど高齢者の見守りの話があったと思います。特に独居老人については、どうやって見守っていくかということが、すごく問題になりまして、特に今は全国的に避難している状況でありますから、そうなりますと、人海戦術が一番なのではないかと思っています。

今、私ども避難区市町村は、原発特例法という法律があつて、住民票を移さなくても、避難先市町村である程度の行政サービスを受けられるわけですが、残念ながら、民生活動



については入っていないんです。だから、民生委員さんに情報は提供できないんです。ですから、できれば、避難先の市町村さんの民生委員活動の一環として、避難者についても見ていただければと思っています。

他方、引受先の市町村も、特にいわき市さんなどは、かなりの避難者を受け入れてもらっていますから、今の民生委員の活動では、人が足りないということがあると思いますので、例えば民生委員は市町村の住民でなくてもいい、避難者でもいいのではないかと。避難者は家で何もしない方が多いんです。そうすると、ひきこもりの原因になってしまいますので、逆にそういう方々にも、例えばいわき市にいる富岡町の町民の方に民政委員になっていただくとか、そんな流れになればいいと思います。

あと、ICTを使ったという話もありましたが、先ほどの話にあった、助けてというボタンよりも、元気だよというボタンのほうが、すぐにできると思います。ボタンを押すのも面倒な方もいらっしゃると思いますが、既に押せば通報がいくとか、そんな仕組みがあるので、もし国のほうで、高齢者の見守りについては、各町が独自に考えるのではなくて、もちろん各町も独自に考えられますが、現状では各町に差をつけてはいけません。国が率先的に、独居老人の家にそういう仕組みを構築してほしいと思います。

先ほども火災報知器という文字があって、はっと思いついたんですけども、今、ウェブカメラで、例えば動きがあったときだけ映すというものがあるので、逆に動きが何時間もなかったら通報するという機能もできると思います。そういう仕組みも国のほうで考えていただければと思っています。

いろいろしゃべらせていただきまして、ありがとうございます。

○小川氏 それに対して話をしてもいいですか。

○司会 どうぞ。

○小川氏 タブレットを使わなければ、情報を得られないというのは、苦痛を招くことなので、それで利用率を考えないということはいいことだと思うんですが、せっかくあるものをうまく使ったらどうだろうかという発想も一方であるかと思っています。そういう意味で、せっかく配られているのならということで、私は一生懸命考えていて、げんきとか、そういう使い方、確実な安否確認が可能なのと思うから、お話をした次第です。

例えば民生委員さんとの関係ですけれども、一緒に避難している人の中で、相互見守りというのは、とてもいい案だと思います。ただ、それを民生委員さんにするどうかは、また別の問題だと思います。いずれの地域においても、民生委員さんたちは自分の仕事を持っている人もいて、忙しいので、全ての家を人海戦術で毎日回って、確認するということが不可能なんです。ですから、1日1回これを押してもらおう。民生委員さんはそれで確認して、プラスαでいろんなことができるようにしておくからというのが、お互いに精神的にも安定するし、いい方法のように感じています。

センサーを国のほうでというのは、ちょっとむちゃな話です。センサーというのは、そんなに確実なものではないんです。先ほどスマホの実験のところでも話しましたが、転倒

センサーというのは、例えば犬の散歩をして、引っ張られているときも転倒しましたと出るんです。同じような動きだからなんです。それを確実に転倒までもってくるには、技術的に積み重ねが必要です。

それから、ウェブカメラをつけたらとおっしゃるんですが、これもあちこちで私も実験はしていますけれども、家の中に人がいないときに、外出なのか、倒れているのかということ判断するには、もう一つ別の情報が必要なんです。外出をするときには、外出ボタンを押して行ってくださいということが、プラス $\alpha$ で必要なんです。これが忘れられるんです。だから、動きがないといって駆けつけてみたら、旅行に行っていましたとか、誰にも言わずに急に入院しましたということが起きます。

お茶っこも、私がお付き合いしているような、岩手県の山の中のまきストーブをたく方たちは、電気ポットは使いません。でも、都会の高齢者さんは電気ポットが役に立ちます。

トイレのドアに一律でセンサーをつけたある市があります。おじいちゃんの中たちには、トイレのドアを絶対に閉めないタイプがいらっしゃるんです。そうすると、この人たちにとっては、本人は見守られているつもりでも、見守っている側はオオカミ少年状態で、この人はどうせになってしまっていくんです。だから、センサーというのは、地域性とその人のライフスタイルに合わせて、照準を合わせないと、一体何を測定しているのやら、本当にわからなくなる仕組みなんです。だから、国で一律なんてことはあり得ないんです。

私の研究の結果、その地域でその人に必要になってきたら、何がいいのかということ工夫しなければいけないから、これはコストがかかるものなんです。ですから、先ほどから言っているように、おげんき発信という安い仕組みとセンサーを組み合わせておくと思います。

おげんき発信がなかったときに、山間僻地ですぐに駆けつけられないようなみまもりセンサーさんは、センサーを見るんです。そうすると、夕べの3時ぐらいに動きが残っている。だから、今朝、午前中は発信がないけれども、とりあえず数時間前まで動いていたことがわかっているから、今すぐに駆けつけをしなくても、もうちょっとしてから駆けつければいいのか、そういう判断に使っています。

あと、電力中央研究所がつくっている、電気の使用量によるセンサーにおげんき発信をつけてもらったのもそのとおりで、電気の使用量も、毎日のデータの積み重ねの中から判断するんですけれども、夏でも温度による違いがあつて、エアコンをすごく使う日と使わない日が出てくるんです。そうすると、前日と違うということで、アラームが出たりするんです。だから、それにおげんき発信をプラスして置いてもらおうと、ここで確実性が増すとか、そういう使い方をしていただきたいというお願いをしているところでございます。○柵氏 私からも補足させてください。

高齢者に対するサポートを考えると、60代も、70代も、80代も、90代も同じかというと、全部違うと思います。それから、同じ60代でも、ひきこもっている人は、体は何ともなくても、認知が進んでいたりする人もいらっしゃるし、先ほどの例のように、75歳に

なっても大学に入って頑張っている人もいます。

いろんな状況があるので、今、小川先生がおっしゃったように、見守りが必要な方に対するサポート、体は何ともないんだけど、ひきこもりをしない、要するに地域包括サービスの中の一次予防と言っていますが、今は元気だけでも、このままだと、5年後にはいろんな形で認知などが進んでいくのではないかということ、防ぐ対策も非常に大事だと言われます。

私が紹介した切り口は、高齢者の出番づくりということです。いろんな形で、高齢者もまだまだやれることがある、役に立つということが生きがいになったり、外出をするという気持ちをつくっていくと思います。そういう意味では、出番づくりはとても大事だと思います。

富山市は高齢者がすごく多くて、単独の世帯が1万世帯以上あると言われていたんですが、いわゆるスマートシティというの、いろんな地域で進んできています。これは家の中にいろんな見守りのセンサーだとか、そういう武装をしてやっていくというものです。スウェーデンなどは、それでかなり大きなビジネスになっているというんですけども、日本はどうかと思います。

富山市は中心街に高齢者が運転しなくても生活できるように、中心街に高齢者の住宅を集めているんです。車でなくても生活をしやすくする、いわゆるコンパクトシティという考え方で、まちづくりを進めているんです。正直、高齢者は住みやすくなるのですが、加えて何が必要かという、出番づくり、生きがいづくりです。そういう意味では、両面要るのではないかと思います。技術はどんどん進んできて、いつかは完全にICTで見守られるかもしれませんが、やはり人とのつながりとか、自分の出番がないと、だめなのではないかと思います。

○富岡町 どうもありがとうございます。

そのとおりだと思います。私が先ほど言ったのは、よくよく考えると、問題点がいっぱい出るのももちろんわかっていたんですが、例えばこういう取り組みもできるのではないかというお話をさせていただきました。

何が言いたかったのかといいますと、避難者の見守りを本気で考えるのであれば、先ほども言いましたけれども、市町村は当然考えますが、やはり国も率先的に、今、お二人が言った研究も含めて、本気で考えていただきたい。それが私が一番話をしたかったことです。

どうもありがとうございました。

○司会 ほかにございませんでしょうか。

○南相馬市 後ろの席からすみません。南相馬市に県から駐在しています、佐藤と申します。

今日、お二人の先生から、非常に可能性が広がる話を聞いたものですから、抽象的な話になってしまいますけれども、御質問したいと思っています。

1つは、私は3月まで福島県の男女共生センターというところに勤めていたんですが、そこにおりましたときに、浪江町さん等から避難している方と地元の高校生の交流にかかわらせてもらったんですが、地元の高校生たちが仮設住宅を訪問して、その中でいざというときに、簡単につくれる非常食を考えようという授業をやりまして、浪江の方に来ていただいて、講師になっていただいて、いろいろと発表をお伺いしたんです。

そのときに一番印象に残っていますのが、浪江から講師で来ていただいた方も、地元の高校生たちに教えられて有意義になった。それから、地元の高校生にとっても、先生の言葉をおかりすると、今の高校生は、日本の場合、恵まれているので、本当に命にかかわるような危険とか、そういうものを身につまされて考える機会が少なかった。ですから、仮設の方々と一緒に考えることで、将来何かあったときも強くなれる。だから、高校生にとっても非常によかったんですと、先生がおっしゃったんです。

そこで、お互いに学び合うことで、お互いに相乗効果になる可能性があると感じたんですけれども、そういう意味では、今日、お二人の先生からいただいたICTを活用したコミュニティというのは、よく避難のときに課題になるとされる世代間の交流、もう一つは地域間の交流、この両面において、今、福島県は非常に大変な思いをしています、大変な思いをして避難していることとか、原発事故に関することというのは、逆に素材になっていくのではないかと思います。

日本は地震の多い国ですから、災害というのは、全国どこでもあり得ると思うので、例えば高校とか、大学とか、いろんな地域の方とも交流するときの世代間交流とか、地域間交流で、非常に有意義な可能性の広がるツールになり得ると思ったんですが、その2つの点で、抽象的な質問で恐縮ですが、可能性というか、何か聞かせていただければと思います。よろしく願いいたします。

○小川氏 基本は自助・共助です。今、2人が言っていることは、高齢者さんが自分で頑張るという部分も言っていますけれども、それをお互いに支え合うという部分もあります。

それから、共助の中には、同世代だけではなくて、今、おっしゃるように異なる世代、異なる性別、異なる地域の方たちが交流することによって、お互いに強くなっていく部分はあると思います。

まさにおげんき発信で見ている、先ほど申し上げたように、岩手県社協ができなければ、青森県社協の資源を持ってきてみたいなことを、私は研究者なので、縦割りに縛られずにつながりをつくっているところがあるんですけれども、そういうところで、新しい価値が生まれてきます。だから、おっしゃるとおりだと思います。

高校生の話をサトウさんがされましたけれども、私たちの大学も割と全国的な大学と組みながら、いわてGINGA-NETというボランティアの活動をしています。ほかの県から来てくださった大学生と交流することによって、うちの大学生も学んでいますし、沿岸に行って、自分たちがボランティアをすることによって学ぶこともたくさんあります。これはサービスマーケティングと私たちは言っているんですけれども、何かサービスをしながら学ぶ

ということで、学生たちも育っておりますので、まさにおっしゃるとおりだと思います。

この辺は、柵さんのほうが、お詳しいところだと思います。

○柵氏 今日お配りしました資料の17ページのグラフは、非常に幅広い世代が参加している状況をあらわしているんですが、これはやはりインターネットの効果があります。働き盛りの方が参加できるという最初のきっかけとしては、インターネットが非常に大きな力を持っています。

逆にインターネットを活用していない、富山のある機関のデータになると、M字型になるんです。ちょうど働き盛りが落ち込んでいくんです。そういうデータが出ているんです。NHKの学習関心調査でも、そんなふうに出てくるんです。

そういう意味では、働き盛りの世代というのは、子育て世代でもあるんです。子育てに対して、あるいは地域の産業に対しても非常に問題意識を持っているんです。その問題意識は、仕事のため、家族のためということもあるんですが、そういう世代が学び合うことが、日本あるいは地域の力をつくっていく、物すごく大事な部分だと思います。

働き盛りが学び合う機会が少ないというところに、私は問題意識を持っています。高齢者から学ぶこともあるはずだし、次の世代に伝えることは何かということを考えながら学ぶためにも、今、おっしゃっていただいた世代間、学び合いは育てる必要があると思います。

それから、地域間は、何もしないと育たないんですけれども、いろんな形で私たちも声をかけ合って、例えば先ほどの手仕事図鑑などでも、自分の地域の職人さんを取材しているだけでは、少ないし、1年にたくさんはできないんです。だから、いろんな皆さんで力を合わせてやるというのも1つ大事なことですし、それで集まったものをみんなで使い合うという考え方は、まさにインターネットの1つの使い方だと思います。

先ほど御説明できなかつたんですが、このように、手仕事図鑑の中に富山の手仕事、和歌山、高知、徳島、尾道、熊本などいろいろな地域の手仕事図鑑が入っていて、例えば岩手の手仕事図鑑なども作ることができます。ここに福島の手仕事図鑑が入っています。今、入っているのは1つだけで、大黒屋さんの伝統工芸です。これを1つ取材してつくるにも、随分苦勞されたと思うんですが、こういう取材が得意な方も地域にたくさんいらっしゃるのではないかと思います。

(映像が流れる)

この方も割と若い方だと思うんですけれども、先代から引き受けて、伝統を守ってこういう方もいらっしゃると思います。こういう世代間を守るための若い方の言葉の中にも、世代間の学びとか、そういうものは非常に大事だと思います。これからの方が活躍していくためにも、こういう方を紹介したり、あるいは子供たちもこういう人たちの心をぜひ学んでほしいと思っています。

私からのお願いですが、こうやって教材を1つつくってはいますけれども、これをぜひ活用する子供たちの学習の場をつくるという意味では、仲間づくりが欠かせないと思いま

す。今、1人で挫折したような状態にいるんですけども、きっと仲間が集まると、また元気にやっていけるのではないか。ちょうど郡山に住んでいらっしゃる方ですけども、そんなふうには願っております。

○田村氏 田村です。

今、ここの担当をしている復興庁の部署は、原子力災害対策班だと思うんですが、御存じのとおり、ほかにもいくつか部署があって、例えば総合政策班ですと、今、新しい東北というコンセプトでいろんな事業をやっている、その中で、これは御存じだと思いますが、新しい東北の先導モデル事業というものを、この間、公募しまして、450件ほどあったうちの66件ほど採択していますが、400件落ちているんです。その中にもいろんな提案がありまして、いろんな企業ですとか、大学から提案が挙がっているんです。

今日の事例なども、県立大学さんとか、NTTドコモとか、企業や大学が持っているいろんな知識とか、アイデアとか、素材をどうやって生かすのかという中で、生まれてきていることだと思います。

復興庁の中に企業連携推進室というものもありますし、私がおりますのは、ボランティア・公益的民間連携班という、企業の中でも、CSRとか、社会貢献を担当している部署との連携をしているところなんです。どうすれば、企業や大学が持っている知識、経験、技術をダイレクトに皆さんとつなぐことができるのか、実際、日々悩んでいるところではあります。個別の企業の方をマッチングするというのは、なかなか難しいところでもありまして、ICTを活用して、パーフェクトにこれをやればOKというものがあれば、それは国で法律でもつくって、見守りはこれでいくとなるんですけども、ずばりこれだけでOKというものもないと思いますので、しばらく実験をしないといけないフェーズだと思います。

その辺は、復興庁のほかの班ですとか、復興局にもいろんな情報があるのではないかと思いますので、皆さんにこういうことで悩んでいるだけけれども、こういう技術とか、知見を持っている企業とか大学の情報はないのかみたいなことも、むしろどんどん投げただけであれば、いいのではないかと思います。

以上です。

○司会 浪江町さん、お願いします。

○浪江町 浪江町の小島といいます。

今日はありがとうございました。

タブレットの関係で、うちの町はまだタブレット端末は導入していなくて、フォトビジョンという一方的な配信のもので、写真とか、あるいはネットの情報などはっております。

そちらの機器もだんだん壊れてきて、次のステップということで、タブレットも検討しなければと思ってはいるんですけども、今日の小川先生のお話を聞いて、ボタンがいっぱいあると使ってもらえないとか、あるいは徐々に慣らしていくことが大事なんだと思いました。

あとは、見守りというところに特化したシステムなので、狙いが明確なので、それを導入して、利用者にもすごくわかりやすく、使っているんだという感想を持ちました。

タブレットになると、先行して実施されている方も、稼働率の部分で悩みがあるような話も聞きますし、どうやったら実際に使ってもらえるのかというのは、自分としても考えるところはあるんですが、仮にこれから入れるとして、こんなふうにしたらいいのではないかというアドバイスがあったら、ざっくばらんに何でも結構なので、アイデアとして参考にさせていただきたいと思います。

あと、先ほどの見守りのシステムも、導入の際に、幾ら簡単なシステムとはいえ、お年寄りの方には結構説明しないといけないと思って、その辺の説明というか、導入に当たっての注意点なり、工夫した点があればお聞きしたいと思いました。

もしかしたら、そういう指標はないのかもしれないんですけども、おげんき発信のシステムの部分で、稼働率に関してはよくわからないんですが、先ほどのどのぐらい安心を感じるかみたいな、それこそが指標なのかもしれないんですけども、それ以外に何かこれだけは使われていますとか、そういったデータがあれば、参考にさせていただければと思います。

3点ほどお願いできればと思います。

○小川氏 おげんき発信は、特化した仕組みで私たちは始めていました。見守りに特化したしということです。ただ、できるだけ普通の機器を使いたいと思っていたので、今、岩手県社協で使っている、いわておげんきみまもりシステムは、映像でも見てもらったように、どんな電話機でも使えるんです。携帯電話でも、黒ダイヤルもまだ岩手では残っていますから、プッシュフォンでも、とにかく電話番号を登録すれば、どこからでもというのは、とてもユニバーサルデザインなんです。だから、私は特化した端末はむしろ要らないというか、つくらないほうが良いと思います。普通の町民さんに配られる端末があるのだとすれば、タブレットがあるのだとすれば、そのタブレットの中の1機能だけ最初に見せて、使えるようになってきたら、ほかのところを見せていくみたいなやり方もあるのではないかと考えております。

先ほど2番目の映像で見せたように、私はなるべく普通に、誰でもとしたいので、スマートフォンも、ドコモさんと実験をしたのは、らくらくフォンを使っていますが、基本的には、学生でも誰でも使うスマートフォンと同じ端末です。だから、特化をした見やすい画面から入ったとしても、ごく普通に使える人は、次々といけるようなことを考えておいたほうが良いと思います。

実際に滝沢で30人でやったときも、一番ハイパーな夫婦はゲームをやっていました。ただで使える期間に一生懸命ゲームをやりましたという人たちもいましたし、テレビを見ましたとか、FMを聞きましたとか、いける人はどんどん先へいってしまうんです。だから、柵さんがおっしゃったように、多様な人たちが一緒に使えるというところがいいところなので、ただ、入り口は簡単に、そして、発信をしたことの喜びが単機能でもあるように、

そこから次に進めるようにということが、ユニバーサルデザインなのではないかと思いません。

説明の仕方ですけれども、タブレットをやったことのない人、機械は苦手だとか、ちょっと虚弱になった高齢者さんたちに説明していく場合には、私たちの岩手では民生委員さんたちと組んでいます。県社協さんの中でやっているの、県社協が民生委員さんの協議会の事務局でもありますから、民生委員さんたちと、この10年間、研修をしたり、話し合いをしたりしながら、やってきました。誰が使うといいのかということが、一番よくわかっているのは、民生委員さんなので、選んでもらって、そして、お話をするときは、何人かが詰めて、民生委員さんと高齢者さんと一緒に話を聞いていただくという形をとっています。

ただ、広域避難をしていらっしゃる方たちの場合は、そういうわけにはいかない部分があると思いますので、そこは適宜臨機応変に、普段見ていらっしゃる方、場合によっては家族に先に説明をして、家族の方からお話をさせていただくことも有効かもしれませんし、学生ボランティアを育てて、その学生ボランティアが回って歩くという方法もあるかと思っています。

もう一つは、稼働率、指標です。第3次では、国の研究費をいただいたので、おげんき発信を使ったら、元気になりますということが出ないかということ、何回も調査をしたんですけども、高齢者さんはだんだん加齢に伴って弱っていくので、健康度などは、おげんき発信をやったからとか、見守りが手厚かったからといって、上がらないんです。これは当然のことです。

そうなんだけれども、主観的な満足感は上がります。それが先ほどお見せしたデータで、おげんき発信によって安心を感じるかとか、これからも使いたいかということを知ると、非常に強くそこを感じるという人は5割、6割なんですけれども、どちらかと言えばまで入れると9割になります。だから、利用し続けたいという方が非常に多いです。

ただし、おげんき発信もいつまでも使えるわけではなくて、先ほど認知レベルが下がったら使えなくなるという話をしましたが、当然亡くなる方もいますし、虚弱になると、面倒くさくなってくることもあります。そのときに無理強いをする必要は全くなくて、そのときにはセンサーなど、ほかのものに置きかえていけばいいんだと考えています。

もう一つの指標、稼働率ですが、おげんき発信は24時間に1回とにかく押ししてもらわなければ困るものなので、稼働率を100%近くにしたいんですけども、岩手で1,000人やっていますと、毎日の自己発信率は平均95%です。5%ぐらい発信がなくて、そこを追いかけていくという形です。

ただし、人によっては、だんだん下がって、月の平均発信率が20%という人も利用者には入っています。それでも、おげんき発信をやめるということをその人が選ばない限り、ずっとやってもらっています。それが生きがいであり、つながりであるからです。その人が20%しか発信しなくても、8割は個別に社協のみまもりセンターから毎日電話をかけて、



今日も元気でよかったねと終われば、それでいいわけですから、発信率を100%にすることが目的ではなく、そういうつながりを持続させていくことが目的です。

よろしいでしょうか。

○浪江町 ありがとうございます。

○柵氏 補足します。

小川先生が対象とされている見守りの必要な方々と、私たちの対象者は少し違っていて、いわゆる予備群です。罹患していく、あるいはひきこもりの予備群、高齢者全体のうちの7割、8割がそうだと思うんですが、そういう方を対象にしているわけですが、私たちの場合は、つぶやきの発信数、外出回数のカウントをとっています。ふえるかという、そうでもないんですが、1つの目安としてとっています。

それから、この活動がこれだけ続いている理由は、サポーターのコミュニティがあるということだと思います。サポーターは無理をしないで、働き盛りの人も、家からでもサポートができる。つぶやきを読んだり、いわゆる傾聴活動をしてあげているんです。つぶやきを聞いてあげる人、そういう人の存在がつぶやきをふやす大きな理由になるし、サポーターがいるという安心感があるのではないかと思います。

○司会 ありがとうございます。

それでは、時間になりましたので、特にこれだけ聞いておきたいということがなければ、これで終わりにさせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

それでは、第5回「コミュニティ研究会」をこれで終わりにさせていただきます。

次回ですが、もう一度、有識者からの話題提供という会を設けさせていただく予定で、今のところ、1月の中旬を考えております。次回は三宅村の方にお越しいただきまして、三宅島の噴火のときの避難状況、コミュニティづくりのヒントをいただきたいと考えております。

それでは、本日はありがとうございました。